

会員の広場



偽の万能薬

瀧口 勝行（東京）

財政赤字を中央銀行のファイナンスによって手当する、いわゆる「財政ファイナンス」によって通貨が膨張して行くと、その結果はどうなるのか。誰にとっても気がかりだが、誰もその結末を予想したくない。だが経済学や金融政策とはおよそ無関係と思える古典籍

の中に、無定見な通貨膨張が齎す悲惨な結末をあらさまに記述しているものがある。

ゲーテは、ファウスト第二部にメフィストフェレスを、某国皇帝の財務顧問として登場させた。メフィストフェレスは、帝国の栄光を取り戻す為に、その「本来」の領土に眠るという架空の「財産」を担保に、皇帝署名の紙幣を大量に発行させ、内外にばらまく。帝国は、東の間のバブル景気を謳歌するが、やがて債務不履行、そして内乱と戦争によって滅ぶ。

メフィストフェレスには、もちろん、こうなることが分かっていた、悪魔の業として。宰相も予感した、信仰と良心の疼きによって、皇帝にも逡巡があったが、天文博士なる賢者

（変身したファウスト）の言葉によって安心を植え付けられた。

財政ファイナンスの破綻から来る経済危機の諸相は、Reinhart & Rogoffの七百年にわたる統計的研究の成果（This time is different 2009）を紐解くまでもあるまい。

「通貨を膨張させるといふやり方は、下しくそな国家経営者が第一番目に飛びつく偽の万能薬だ。二番目が戦争である。この両者は、いずれも束の間の繁栄をもたらす。そして永遠の崩壊につながる」と総括したのは、あの『武器よさらば』を著したヘミングウェイであった。

「偽の万能薬」の効用を説く理論は、いまなお多くの統治者の意識を覆っているかに見

える。現代のメフィストフェレスは本気で市場経済と民主主義の破壊を意図しているのだろうか。我々は、メフィストフェレスの畏、即ち政策に隠されている真の思想を、精一杯の知性と冷静な目で見破らなければならない。一九三六年、ケインズは台頭するナチズムを横目で睨みながら、その『一般理論』を次の様に締め括った。「経済学者や政治哲学者の思想は、それらが正しい場合も間違っている場合にも、一般に考えられている以上に強力である。権力の座にあって天声を聞くと称する狂人たちも、数年前のある三文学者から彼らの気狂いじみた考えを引き出しているのである。（中略）遅かれ早かれ、良かれ悪しかれ危険なものは、思想である」。